

たつの市揖保川町正條の棟梁名村公男さん(57)が、伝統建築の技を応用し、日本家屋の耐震性を高める研究に取り組んでいる。9年間かけて考案した工法の強度を実証するため、このほど実物大の模型で公開実験を行った。現場の目線で新技術を探求する姿が、大工仲間にも刺激を与えている。(古根川淳也)

伝統建築の技 耐震に応用

「貫」12本使い家屋の復元力向上

名村さんは龍野実業高校を卒業後、大工に弟子入り。26歳で独立し、棟梁として伝統工法を守る家造りを続けている。

今回実験したのは、壁の中に通す「貫」という部材の数と形を工夫し、家屋の復元力を高める工法。通常、壁に板状の貫を3枚使うことが多いが、名村さんは角材状の貫を12本使い、木材のしなりなどを生かして弾力性を高める方法を考えた。

構造設計が専門の1級建築士、太田彰さん(45)と加古川市への協力で実験を繰り返して、強度も復元力も高まることを確認。最終段階として、実物大の壁の模型を造り、実験道具も特注した。

公開実験では、大工仲間や建築士ら約20人が見守る中、壁に横から加えた力と傾きの度合いを計測。通常の家屋なら「半壊」と判断される角度まで変形させても、ほぼ元通りに復元することを確認し

たつこの棟梁・名村さん

実験で「半壊」が元通りに



た。実験を見学した姫路・町家再生塾の塾長で、1級建築士の山田克幸さん(46)は「家屋の粘り強さを高める面白い考え方。研究の端緒としては十分な実験で、現場の大工がここまで取り組むのも素晴らしい」と評価する。

名村さんは「熊本地震のように強い余震が繰り返し起きても、復元力の高い家は強いはず。この工法は誰でも自由に使って、日本建築を見直してほしい」と話している。

角材状の貫が入った壁の模型前で、実験の説明をする名村公男さん(左端)＝たつの市揖保川町正條